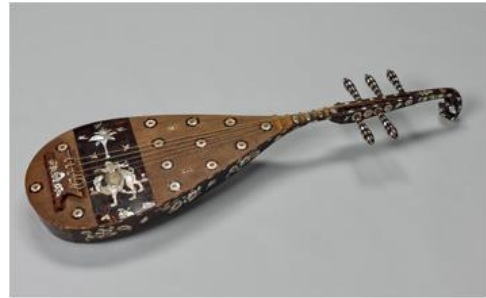


168 螺鈿の東西物語 (2023 年 6 月 15 日)

今回は、貝が生み出す真珠にまつわるエピソードをご紹介します(※)。また貝に関するお話しで、今回は螺鈿(らでん)を取り上げます。

日本における螺鈿とは、貝殻の内側にある光沢を帯びた虹色の部分(真珠層)を模様の形にして削り出し、漆地や木地の面に丁寧にはめ込む又は貼り付ける優美な装飾技法です。

螺鈿は、9 世紀頃に中国から伝えられて、日本で美しい装飾に発展しました。奈良の東大寺正倉院には、8 世紀に唐からもたされた螺鈿が施された琵琶が収められています。このことから、古くから日本で螺鈿が珍重されてきたことが分かります。平安時代(794-1185)になると螺鈿の技術が発展し、螺鈿で細工されたものが、中国や高麗への贈り物として用いられました。



出典：正倉院宝物 Sources: Shosoin Treasure



16 世紀半ばから 17 世紀前半までの間、ポルトガルやスペインの商人が日本に来航し、南蛮貿易が行われました。日本からヨーロッパへもたされた漆器の一つである洋櫃(ようびつ)には、螺鈿が使われています(※)。また、19 世紀後半には、フランスでも螺鈿で美しく装飾された筆筒や椅子が作られました。これらの家具からは、ジャポニズム時代の日本の影響を見取することができます。このように、日本の螺鈿は、ヨーロッパの人々の目を楽しませ、ヨーロッパの美術にも影響を与えてきました。



先日、パリから北に約 20 キロのエクアンにある国立ルネサンス美術館で、貝殻の光沢のある部分だけで作られたスプーンやカップ&ソーサーを見つけました。美術館の解説によると、このカップ&ソーサーは 17 世紀か 18 世紀にインドで作られて、ヨーロッパへ輸出されたものです。貝殻の光沢のある部分で作られた工芸品は、ルネサンス時代にとっても好まれ、その後も作り続けられたとされています。私は、貝のカップ&ソーサーを見て少々驚きました。その理由は、日本では、貝

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

だけで作られた食器をあまり目にすることがないからです。私は、貝からの光沢のある部分は、漆器に用いられる装飾技法の一つである螺鈿に使われるものだと考えていましたので、貝を贅沢に使った工芸品があるとは想像していませんでした。（写真右は、16 世紀にフランソワ一世のお抱え職人が作った貝で覆われた箱、ルーブル美術館蔵）



実は、フランスでも、貝を使った様々な小物が作られていました。パリから約 50 キロ北にあるメリュにある細工物博物館には、貝や象牙で作られた扇子の骨、動物の骨と黒檀で作られたドミノ、貝ボタンやそれらを作るために使われた機械が展示されています。メリュがある地域がパリから近く、この地域の人々とパリの職人との交流があったことが、この産業の発展に関係しているのではないかと推測されていますが、正確なことは分からないそうです。貝で作られた扇子の骨や貝ボタンは、貝が光の角度によって七変化するによって高級感を与えています。



日本でも、19 世紀末以降にヨーロッパの影響で貝ボタンが作られたことはありましたが、その生産量は限られます。この他に貝だけで作られた工芸品は、多くはありません。その理由ははっきりと分かりませんが、貝は螺鈿に使われるものとして日本に伝えられ、螺鈿が漆工芸品の装飾技法として発展してきたからかもしれません。黒色の漆器の中で光り輝く螺鈿で作られた模様は、見る人の目を惹きます。黒色の漆と貝の光沢のコントラストが、日本人の美意識に合っていたことも考えられます。一方、ヨーロッパでは、貝の美しさを直接的に表現する煌びやかで豪華なものが、好まれたのかもしれませんが。いずれにしても、フランス人も日本人も、貝の美しさに惹かれたのは同じであっても、その表現方法に違いがあるのは、興味深いと思いました。

※ [167 真珠の永遠の輝き](#)

※ [72 南蛮貿易と漆器](#)